

自己紹介

平成三年五月以降に昇格又は就任

解剖学第一教授

宮内 亮輔



鹿児島市で生まれ、幼時に長崎市に移り住み、昭和三十六年長崎大学医学部卒業、一年間のインターン生活を終り、長崎大学大学院医学研究科に入学し、解剖学講座で骨格筋の比較解剖学的研究(肉眼解剖)の指導を受けました。昭和四十一年大学院修了後も同講座に居座り、教育・研究に従事しましたが、昭和四十七年四月福岡大学に医学部が新設されるにあたり、同年七月福岡大学助教授に採用され、解剖学第二講座で三好萬佐行教授の指導のもとに、講座の創設に参画し、肉



前述のごとく、十三年間余福大を離れたことが、その間、福大を外から観て、福大の長所・短所が、内に在る時よりもむしろ、明確に認識出来たと思います。本学の長所を活用して、教育・研究に最善を尽くしたいと念願致して居りますので、今後共、ご指導・ご鞭撻を戴くことが出来ますよう、お願い致します。

外科第一教授
池田 靖洋

私は、昨年来、皆様をお慮がせしている普賢岳の麓、島

教室紹介

福岡大学衛生学

昭和49年に衛生学教室が開設されて以来、初代江崎廣次教授のもとに地道な活動が続けられている。当教室の現スタッフは、江崎教授の他、畠博助教授、百瀬義人助手、渡辺大介助手、石井俊也助手、加藤真澄教育技術職員の6名である。主な教育活動の分野は、農村医学・人口問題・環境保健・産業保健であり、昭和50年から環境衛生(水質、生体測定、空気環境、疲労等)の実験実習と上・下水塵芥処理等の環境衛生施設の実地見学が取り入れられ

た。昭和60年からは野外実習を始めた。保健所や地域の実際の現場での問題に当たり、テーマごとにレポートを作成することにより、学生の社会的な眼を養っている。研究活動としては、厚生省科学研究費による農村地域におけるブライマリーヘルスクエアの確立に関する研究(昭和59・60年)、農村地域における死亡の実証的研究(昭和61・平成元年)が報告された。現在は、10年にわたる農村の健康管理活動の評価、肝疾患死亡要因をさぐるた

た。昭和60年からは野外実習を始めた。保健所や地域の実際の現場での問題に当たり、テーマごとにレポートを作成することにより、学生の社会的な眼を養っている。研究活動としては、厚生省科学研究費による農村地域におけるブライマリーヘルスクエアの確立に関する研究(昭和59・60年)、農村地域における死亡の実証的研究(昭和61・平成元年)が報告された。現在は、10年にわたる農村の健康管理活動の評価、肝疾患死亡要因をさぐるた

た。昭和60年からは野外実習を始めた。保健所や地域の実際の現場での問題に当たり、テーマごとにレポートを作成することにより、学生の社会的な眼を養っている。研究活動としては、厚生省科学研究費による農村地域におけるブライマリーヘルスクエアの確立に関する研究(昭和59・60年)、農村地域における死亡の実証的研究(昭和61・平成元年)が報告された。現在は、10年にわたる農村の健康管理活動の評価、肝疾患死亡要因をさぐるた

た。昭和60年からは野外実習を始めた。保健所や地域の実際の現場での問題に当たり、テーマごとにレポートを作成することにより、学生の社会的な眼を養っている。研究活動としては、厚生省科学研究費による農村地域におけるブライマリーヘルスクエアの確立に関する研究(昭和59・60年)、農村地域における死亡の実証的研究(昭和61・平成元年)が報告された。現在は、10年にわたる農村の健康管理活動の評価、肝疾患死亡要因をさぐるた



最も大事な外科医の姿勢を教えていただきましたのが三宅博先生です。それから西村正也先生、昭和四十二年癌研究会附属病理科にまいりまして四年間お世話になりました。梶谷鑑先生、高木国夫先生、癌研から帰りました西村正也先生、そして中山文夫先生、昭和五十九年四月福

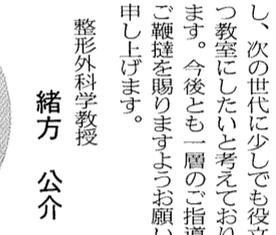


昭和四十七年に九大医学部を卒業後、西尾篤人教授の主任する九大整形外科に入院し、九州厚生年金病院などで整形外科の基礎を勉強しました。その後渡米し、ボルチモアのユニオンメモリアル病院で一年間のインターンを、さらにセントルイスのワシントン大学整形外科でレジデントとして四年間の専門医研修を受けました。その後ワシントン大学にとどまって医学生

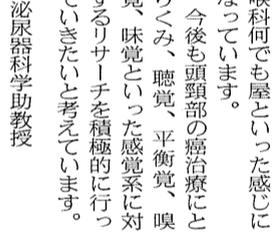


昭和二十三年久留米市に生まれ、昭和四十八年長崎大学を卒業後福岡大学病院の第一回研修医として泌尿器科に入局。その後ずっと福岡大学にお世話になっていますが昭和五十九年六月より三年間田川市立病院泌尿器科部長として一般病院に出張したこと平成二年六月より一年間米国UCLA泌尿器科の臨床客員教授として臨床を悉く観察する機会を得たことが私自身を客観的に見る上で大いに役立った感じがします。興味を持って

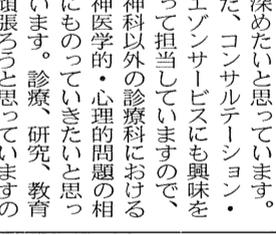
昭和五十七年福岡大学を卒業後、放射線科に入局しました。放射線診断学全般・治療学・核医学について四年間の研修を終え、昭和五十二年に消化器グループに固定しました。主なテーマとしては、消化管のX線診断、内視鏡診断・如置、消化器集団検診(胃・大腸)を中心にやってきました。昨年十月に当大学へ移り、漸く慣れてきた感じがしますが、放射線科での消化管診断を頑張りたいと思っております。



昭和四十七年に九大医学部を卒業後、西尾篤人教授の主任する九大整形外科に入院し、九州厚生年金病院などで整形外科の基礎を勉強しました。その後渡米し、ボルチモアのユニオンメモリアル病院で一年間のインターンを、さらにセントルイスのワシントン大学整形外科でレジデントとして四年間の専門医研修を受けました。その後ワシントン大学にとどまって医学生

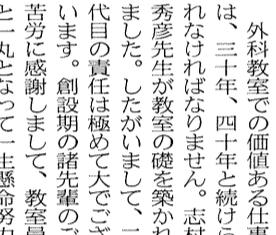


昭和二十三年久留米市に生まれ、昭和四十八年長崎大学を卒業後福岡大学病院の第一回研修医として泌尿器科に入局。その後ずっと福岡大学にお世話になっていますが昭和五十九年六月より三年間田川市立病院泌尿器科部長として一般病院に出張したこと平成二年六月より一年間米国UCLA泌尿器科の臨床客員教授として臨床を悉く観察する機会を得たことが私自身を客観的に見る上で大いに役立った感じがします。興味を持って

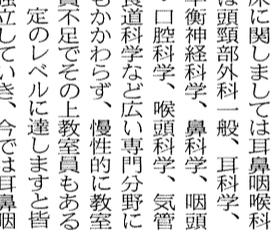


昭和五十七年福岡大学を卒業後、放射線科に入局しました。放射線診断学全般・治療学・核医学について四年間の研修を終え、昭和五十二年に消化器グループに固定しました。主なテーマとしては、消化管のX線診断、内視鏡診断・如置、消化器集団検診(胃・大腸)を中心にやってきました。昨年十月に当大学へ移り、漸く慣れてきた感じがしますが、放射線科での消化管診断を頑張りたいと思っております。

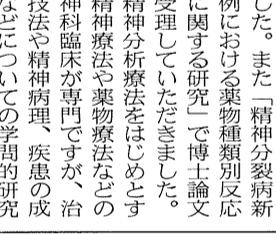
昭和五十七年福岡大学を卒業後、放射線科に入局しました。放射線診断学全般・治療学・核医学について四年間の研修を終え、昭和五十二年に消化器グループに固定しました。主なテーマとしては、消化管のX線診断、内視鏡診断・如置、消化器集団検診(胃・大腸)を中心にやってきました。昨年十月に当大学へ移り、漸く慣れてきた感じがしますが、放射線科での消化管診断を頑張りたいと思っております。



昭和四十七年に九大医学部を卒業後、西尾篤人教授の主任する九大整形外科に入院し、九州厚生年金病院などで整形外科の基礎を勉強しました。その後渡米し、ボルチモアのユニオンメモリアル病院で一年間のインターンを、さらにセントルイスのワシントン大学整形外科でレジデントとして四年間の専門医研修を受けました。その後ワシントン大学にとどまって医学生

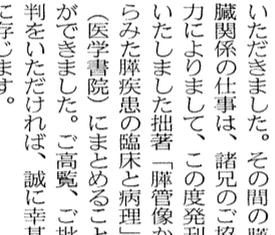


昭和二十三年久留米市に生まれ、昭和四十八年長崎大学を卒業後福岡大学病院の第一回研修医として泌尿器科に入局。その後ずっと福岡大学にお世話になっていますが昭和五十九年六月より三年間田川市立病院泌尿器科部長として一般病院に出張したこと平成二年六月より一年間米国UCLA泌尿器科の臨床客員教授として臨床を悉く観察する機会を得たことが私自身を客観的に見る上で大いに役立った感じがします。興味を持って



昭和五十七年福岡大学を卒業後、放射線科に入局しました。放射線診断学全般・治療学・核医学について四年間の研修を終え、昭和五十二年に消化器グループに固定しました。主なテーマとしては、消化管のX線診断、内視鏡診断・如置、消化器集団検診(胃・大腸)を中心にやってきました。昨年十月に当大学へ移り、漸く慣れてきた感じがしますが、放射線科での消化管診断を頑張りたいと思っております。

昭和五十七年福岡大学を卒業後、放射線科に入局しました。放射線診断学全般・治療学・核医学について四年間の研修を終え、昭和五十二年に消化器グループに固定しました。主なテーマとしては、消化管のX線診断、内視鏡診断・如置、消化器集団検診(胃・大腸)を中心にやってきました。昨年十月に当大学へ移り、漸く慣れてきた感じがしますが、放射線科での消化管診断を頑張りたいと思っております。



昭和四十七年に九大医学部を卒業後、西尾篤人教授の主任する九大整形外科に入院し、九州厚生年金病院などで整形外科の基礎を勉強しました。その後渡米し、ボルチモアのユニオンメモリアル病院で一年間のインターンを、さらにセントルイスのワシントン大学整形外科でレジデントとして四年間の専門医研修を受けました。その後ワシントン大学にとどまって医学生



昭和二十三年久留米市に生まれ、昭和四十八年長崎大学を卒業後福岡大学病院の第一回研修医として泌尿器科に入局。その後ずっと福岡大学にお世話になっていますが昭和五十九年六月より三年間田川市立病院泌尿器科部長として一般病院に出張したこと平成二年六月より一年間米国UCLA泌尿器科の臨床客員教授として臨床を悉く観察する機会を得たことが私自身を客観的に見る上で大いに役立った感じがします。興味を持って



昭和五十七年福岡大学を卒業後、放射線科に入局しました。放射線診断学全般・治療学・核医学について四年間の研修を終え、昭和五十二年に消化器グループに固定しました。主なテーマとしては、消化管のX線診断、内視鏡診断・如置、消化器集団検診(胃・大腸)を中心にやってきました。昨年十月に当大学へ移り、漸く慣れてきた感じがしますが、放射線科での消化管診断を頑張りたいと思っております。

昭和五十七年福岡大学を卒業後、放射線科に入局しました。放射線診断学全般・治療学・核医学について四年間の研修を終え、昭和五十二年に消化器グループに固定しました。主なテーマとしては、消化管のX線診断、内視鏡診断・如置、消化器集団検診(胃・大腸)を中心にやってきました。昨年十月に当大学へ移り、漸く慣れてきた感じがしますが、放射線科での消化管診断を頑張りたいと思っております。

第十八回 医学部慰霊祭



明のために病理解剖を承諾頂いた百五柱、さらに司法解剖をお受け頂いた三十一柱、合わせて七百七十三柱でした。献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、三好医学部長は祭詞の中で、医学の発展のため欠くことのできない解剖に「献体頂いた御霊とその遺族に謝意を表され、さらに「近年、医学は急速な進歩を遂げたものの未解決の分野が数多く残されており、その解明に努力を傾けることが、ご献体いただいた霊位や御遺族の崇高なお心にそとことと信じ、今後勉学、研究、診療にさらに一層の精進をします」と新たな誓いを披瀝されました。

第十八回福岡大学医学部解剖慰霊祭は、御遺族ならびに御来賓の方々、本学教職員と学生約五百七十名が参列し、平成三年十月二十六日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、正常解剖のために献体された三十七柱、病院で死去されて病因究



趣味としては、囲碁、ゴルフ、その他種々やっておりますので、今後ともよろしくお願致します。

昭和六十三年、泌尿器科に復帰し、経尿道的手術を平塚義治講師(現助教)から集中的に指導していただき、少しずつ泌尿器科医らしくなってきました。当科では、私が臨床を離れた期間に、有吉朝美教授(現筑紫病院教授)が導入された Kock pouch 形成術をはじめ新しい手術手技、治療法が次々と行われており、今はまず、泌尿器科の高い診療レベルに遅れないように頑張ることだ、と思っております。どうぞよろしくお願致します。



石井 龍

加藤 寿彦

九州大学耳鼻咽喉科時代より教えを受けていた曾田教授が新設の福岡大学に赴任されることとなり、一緒にやろう

佐々木 淳

聴覚の誘発反応について研究をして来ましたが最近では嗅覚の研究も行っています。臨床に関しましては耳鼻咽喉科は頭頸部外科一般、耳科学、平衡神経科学、鼻科学、咽頭・口腔科学、喉頭科学、気管食道科学など広い専門分野にもかかわらず、慢性的に教員不足でその上教室員もある一定のレベルに達しますと皆

緒方 公介

昭和四十七年に九大医学部を卒業後、西尾篤人教授の主任する九大整形外科に入院し、九州厚生年金病院などで整形外科の基礎を勉強しました。その後渡米し、ボルチモアのユニオンメモリアル病院で一年間のインターンを、さらにセントルイスのワシントン大学整形外科でレジデントとして四年間の専門医研修を受けました。その後ワシントン大学にとどまって医学生

平塚 義治

昭和二十三年久留米市に生まれ、昭和四十八年長崎大学を卒業後福岡大学病院の第一回研修医として泌尿器科に入局。その後ずっと福岡大学にお世話になっていますが昭和五十九年六月より三年間田川市立病院泌尿器科部長として一般病院に出張したこと平成二年六月より一年間米国UCLA泌尿器科の臨床客員教授として臨床を悉く観察する機会を得たことが私自身を客観的に見る上で大いに役立った感じがします。興味を持って

教職四十年に思う

福岡大学名誉教授 志村秀彦



「志村秀彦先生、有難うございまして。平成二年度M5一同」と大書した、たれ幕を掲げて最終講義を飾ってくれた時の感激は忘れられない。

定年退職を間近に控えた平成三年二月二十一日、私のライフワークである「胆石症の諸問題」と題して、長年の集大成をまとめて講義をした時のことである。約二時間にわたり熱心に耳を傾けてくれた学生諸士の顔々が強い印象として脳裏に焼き付いている。

私が今日あるのは恩師を始め、先輩、同僚、後輩達、それに浜山の学生諸士の支えに負うところが、今まで気付かなかつた。退職して一人身になると初め淋しさや空虚さを感じると共に周囲の支えがいかに大きかったかと思ひ知られる。

思えば長い教職生活であった。昭和十九年九州大学を卒業してから四十七年になる。卒業したときは丁度、太平洋戦争の真中であり、直ちに海軍軍医として南方作戦に従軍し、約一年間生死の間をさまよい、悪性マラリアに罹患し、黄疸と高熱にさいなまれながら復員した終戦当時のことだが、悪夢のように思い出される。実家で静養した後、大学に復帰し、荒廃した学園の再建、新しい研究教育体制への適応など、随分と苦労したものである。

昭和二十八年助教として弘前大学に赴任し、副島康治教授のもとで足かけ六年間勉強させて頂いたが、恵まれた環境と好意と友情に充ちた、温かい人の心にかこまれて、生活も充実し、生涯忘れ得な

きたので、教授との間に立つてなだめ役として随分と気を遣ったことを思い出す。結局は当局の介入により紛争はど

うにか収まったが、収まらな

い毎日であった。この間二年間、文部省海外研究員として米国のウェイン大学に留学し、ジョンストン教授のもとで胆石溶解の仕事させてもらった。

大戦前、日本の偏向教育のもとで育った私にとって、アメリカの生活は別天地でありアメリカの寛容さと仕事に対する正当な評価、惜しまざる経済的援助など目をみはるものがあり、日本の無謀な戦争行為が悔やまれて仕方がなかった。当時、数人の日本人留学生がいたが、日本人の昼夜を分かたぬ仕事振りと、研究への意欲と情熱は、流石のアメリカ人もシャッポを脱ぎ、日本の底力を改めて再認識したようである。それまで、私達は理論と形式を重んじてドイツイ式教育をうけてきたので現実主義のアメリカ医学への転換には、かなりの抵抗を感じたものである。しかし、実際にポリクリの現場で見聞する、学生の実地即応姿勢と知識の豊かさは驚かされるばかりであり、従来の日本の医学教育には一抹の疑問を禁じ得なかった。

帰国後、弘前大学、さらに二年後九州大学助教として、研究、診療と共に学生指導に全力を傾倒することになるが、充分な研究費や資料に乏しく、十分な研究活動が出来ず、治療を中心とした新しい臨床医学の開拓、とくに小児外科、肝内結石症、乳癌や肺癌の手術手技、感染症や悪性腫瘍に対する化学療法への情熱を涌き立たせたものである。

この頃は丁度、大学の封建制に対する学生の反発の時期でもあり、東大であった学生運動の火の手が九州にも波及して、学内は混乱し、研究は勿論、診療にも支障を来す状態であった。アメリカの実情を見て来た私には学生や若手医師の気持ちは多少理解で

行く先や行く末を占う重要な問題が山積みしており、このような政治的、社会的問題に頭をつっこんでいては本場の教育は出来ない、学生と教師とがお互いにその立場を理解し合って、一つの目標に向かつて前進すること以外に方法はないことに気付いたので、私なりに教育に専念することになった。

診療の主体は患者と医師との一対一の関係にあることに間違いはない。顔が一人一人違ふように病名は同じでも病態は違っている。最善の治療をするためには患者の訴えや症状だけでは患者の全てを知る必要があり、患者の体質、病状、反応など十分な検査をした上で病勢の判断や治療方針を決めるべきである。特にメスをもつて患者の体に直接手をつける外科医の場合には当然それだけの責任が加わることになる。術中術後の偶発症や後遺症の問題も避けて通ることは出来ない。医師の誠意と患者との十分なコミュニケーションを通じて信頼関係を深めることが診療の第一歩である。ここに良医としての医師の人格と医療技術が要求されることとなる。

良医の条件は、九州大学の元外科教授赤岩八郎先生が指摘されているように、まず、善人であることであり、その根底には西郷隆盛の「敬天愛人」という言葉が隠されているように思われる。このような方針で教育されて来た福岡

大学の学生諸士が約二十年を経た今日一般にどのような評価されているのであろうか。機会あるごとに福大卒業生の務め先で聞いているが、どこでもかなり良い返事がかえってきて満足している。まず、皆「良い人達ですね」という言葉が返ってくる。育ちの良さからくる人の良さがあるかもしれないが福岡大学の恵まれた環境と個性尊重のおおらかな教育姿勢が影響を与えたものと思われ。次に「皆さん、いい腕をもつておられますね」という言葉が返ってくる。自分にも最も適した専門的技術をもつた医師が多いことである。これも医療技術者としての医師の資格が問われて

いる現在、見逃せない大切な問題の一つである。高度の先進医療機器を駆使した診断技術や治療技術もあるが、長い経験を通じて身につけた繊細な技術、即ち所謂「腕」もあろう。いずれにせよ、技術の面でも福岡大学の評価は高いようである。「皆さんいい頭脳をもつておられますね」という言葉はあまり聞かれないのは残念であるが、学問ならいざ知らず、技術者としての医師像からすれば、理屈よりもむしろ誠意と腕がものをいうものと思われ、世相や医療界の現状とも合致している。この考えをめぐると福岡大学での医学教育の姿勢には間違いなく、むしろ私立医大の立場としては二十一世紀をみつめ、新たな方針で教育されて来た福岡

一応満足して良いであろう。しかし、注意すべきは、今後予測される医療上の問題である。医師過剰時代、医療経費の増大、国家財政の逼迫に対する医療法の改正、医療保険の見直しなど医師にとつて苦しい時代が訪れようとしている。社会的経済的安定をうたった昔の医師像がどこか破綻せぬとも限らず、必配なことである。財政的圧迫が遂には医師間の競争や反発、一人よがりの売り込みや売名、自己宣伝、商売根性など医師として恥すべき行為を招かぬとも限らない。昔のよう

な「はだしの医者」とか赤貧にあまんじることや専断としての医師の理想像は現在では勿論、将来も通じないであろう。ただ医師としての本分を守り、人の命と対決していきないう誇りだけは失いたくないものである。他方、技術革新は必然的に専門分化傾向を助長し、医師一人一人の守備範囲は狭くならざるを得ない。今迄のように、患者の全体像から局所病変を見ないで、始めから局所病変のみとらわれて視野を狭めるか、局所を通じて全体像をみるようになるに違いない。一局集中の姿勢は時代の趨勢上、止むを得ない仕儀ではあるが、命と対決してきた私達にとつては何か物足りないものを感じる。「古いな」といえば、それまでであるが相手が生きものである以上、「命なくして何が医療ぞ」と反論せざるを得ない。専門分化の欠点を補う手段として最善の方法は、医師間の情報の交換と協力であろう。通常カンファレンスの場でそれぞれの専門医がそれぞれの立場から意見をのべて合つて真実をさぐり、全体像を通じて最善の方策を講じているのが現状である。しかし、専門知識が深まれば深まるほど、専門領域が狭まり、専門分化が進むことになる。究極のところ、視野が狭小化し、全体像をとらえることは益々困難になるに違いない。従って、各専門医の

意見を統合して患者の全体像から最善の医療を考える医師が望まれるのである。アメリカ力ではコンサルタンツドクターとして経験豊かな医師がこの任に当たっているが、日本では、法的にまだ規定されておらず、ただ学会で指導医という資格をもうけているに過ぎない。

私は昭和六十年から四十四年間にわたって福岡大学に在り、この間に多くの同僚と出会い、共に歩み、共に成長した。この間に多くの同僚と出会い、共に歩み、共に成長した。この間に多くの同僚と出会い、共に歩み、共に成長した。

昭和四十七年四月一日、積雪の中、樋口、利谷、曾田、船津、三好、富田教授等と共に辞令を戴いて昨年三月三十一日まで十九年間、福大に席をおかして戴いた事にまずお礼を申し上げます。

香椎病院での附属病院としての出発の一年は樋口院長の奇妙な役職を引き受けることになったが、私にとって福大での最も誇り高い時代であった。

今迄香椎病院に居られた先生と、新しく福大に行くために採用された先生方との間に採用された先生方との間に、一年後に赴任される先生方の問題、特に代表者である樋口先生は大変だったよう

で、福大の他学部との折衝、福大の体質への理解不足のためのいらだち、それに私を含めた医師団の不満を直接受け合われて大変きびしい立場に立たされ、何事も単科医科大にすればよかったと述懐しておられたのを憶えている。

院長一人では大変という事で副院長をおくべきだということが教授会で議決され、私に決定したが大学当局は副院長の必要なしという事で仲々承知せず、結局院長辞令という形ですっきりしないまま終わってしまいました。

このように医学部と大学との間は長い間ギクシャクした関係が続いて、こんな筈ではなかったという思いがお互いにあったようであったが、次第に理解を深めて、今日の形になってきたのは喜ばしい事である。より一層の相互理解を希望するのは私一人だけではない。

福大十九年間を顧みて

福岡大学名誉教授 高岸直人



開設当時のもう一つの印象は香椎病院から福大病院への入院患者輸送の仕事であった。病院のスタッフが何回も集まり、警察の係の方にも来て戴いて輸送中、患者の急変がどこで起こったらこの病院に頼むという綿密な計画を立てて当日を迎えた。夏の暑い晴れた一日で、警察の先導車を先頭にサイレンの音をひびかせながらノンストップで福岡の東端から西端へと三十分足らずで、患者さんの附添いという緊張感はあるものの、二度と味わえない爽快な気分になる事が出来た。幸いに一人の事故もなく移動完了した時は正直な話、福大病院の前途の洋々たるものを暗示されたような気分であった。

十九年の教授生活と言つて私の講義が始まるのは四年後だったので、丸々十五年の学生諸君との教室での接触であった。初めの数年は函車を合われないと言つた講義の字が理解しがたかつたと思えて向うあいまつて随分と迷惑を受けたように思う。私の学生時代と異り講義を聞く学生の態度には随分と悩まされた。三度ほど大声を上げてどなった事もあったが、一度どなったその学年は二度と騒々しい事がなかったで、そのような場合は試みても良いのではなからうか。もっともこのような状態は福大だけの問題ではないハシリノ講義をフィードバックさせるからと重ねてお願いをした結果、理事会の合意を得る事が出来た。各県にシンポジストを一人ずつお願いし、各々の県で九州一周駅伝選手の体格、血液検査、練習方法、走り等々綿密に調査してもらった。

停年迄の三年間、会長をつづけさせて貰つてシンポジウムを連続して行ない、いろいろなる事を知ることが出来た。毎回一つ問題だったのは若

い教室員への指導であった。みんながそうであるかどうかはわからないが、私に関して言えば、六十才を越すと少しづつ能力が低下して行くのを自覚しはじめ、六十五才を越すと等比級数的に能力の低下を感じるようになって来た。一日も早く停年の日が来るよう待ち望んでいた事も事実であった。私の終わり頃に入院して来た教室の先生方に紙面をかりてお詫びしたい気持ちがある。

しかし一方、七十才まで現役として活躍出来た事は自分の能力とは別に、私に多くの学校外での仕事をさせる時間を与えて呉れた。六十六才の時、今からは戦争によって国の優劣を決める時代ではなくなつたろうし、さすればスポーツこそ民族の戦いの場として最もふさわしいものになるであろうと考え、九州からオリンピックで優勝出来る選手を出すよう私達医師のうちの関係者の力を結集しよう九州各県のスポーツ医師に呼びかけ、私が西日本臨床スポーツ医学会の会長に就任したのを機会にして、第一回九州スポーツ医学会を発足させた。(当時日本臨床スポーツ医学会はなかった)

海外便り

「フランスでの研究生活で思うこと」

坂田 則行

私は、今フランス国立保健医学研究所 (INSERM) と日本学術振興会の給付派遣研究員としてパリXXI大学医学部で勉強しています。最近、福岡医学会からパリ生活について通信するという手紙をいただきましたので、こちらの研究室と日本の大学を比較して感じたことをいくつか述べたいと思います。

私が留学に来ているパリXXI大学医学部は、パリ南東の郊外に位置するクレイユという地区にあります。パリ中心部からはメトロに乗って三〇・四〇分のところで、大学構内には緑も多く、いわゆるパリの古い街並みとは緑の多い風景です。私が勉強している研究室は、結合組織 (コラーゲン、エラスチンなど) に関する生化学、薬理学、病理学的研究を幅広くやっています。私は、現在各型コラーゲ

第二に、こうした他国からフランスに勉強に来ている若い研究者のたくましさです。彼らの多くは、ドクターやマスターをとるため、速い母国を離れフランスで勉強しています。しかし、その資格をとっても、今フランスは失業率が高く、とても就職できないことを知っています。かと言って、母国へ帰っても良い就職口がある訳ではなく、次の職場を探すことは彼らの最大の関心事なのです。ですから、少しでもよい職につけるようにと、いい仕事をし、自己宣伝をし、どこへでも行くつもりです。就職難の厳しくない今の日本で、若い人達が遠い先の安定した生活を中心に職場を決めようとする考えとは、どこか違いが違ふように感じます。

第三に、日本にくらべ研究する時間に実にくらべるとのことです。自然と研究室は国際的になり、その場で各国の国際事情を知ることができるとです。日本のような単一民族で構成されている社会では、なかなか体験できないことでもあり、これからの日本の国際的役割を考えた大変貴重な経験ではないかと思えます。

フランス国立保健医学研究所 (INSERM) またはフランス国立科学センター (CNRS) に所属しています。彼らは、自らの研究テーマに従って研究しますが、その研究成果は年一回必ずその所属機関の審査を経なければなりません。そして、その審査結果に従って、翌年からその研究費が決まられるのです。ある日、その審査官が研究所へ来て、一人一人の研究者の発表を一日中聞き、いろいろ質問していました。その時の互いに真剣なやり取りは実に厳しものでした。このような研究チェック機構が、日本の大学や研究機関にあっても良いのかも知れません。

フランスの研究機構が日本のそれと同じである訳ではありませんので、両者を単純に機械的に比較し、良し悪しを論ずることはできないと思います。しかし、フランスは、現在のアメリカ中心の科学文化圏とは独立した一つの文化圏を目指しています。その意味で、これからの日本の科学文化の国際化に参考に

なることも多いと思えます。あと残された六カ月間、できるだけ多くのことを学んでいきたいと思っています。

日本人にもなじみの深いサンフランシスコからこの文章を書いています。今さら紹介するまでもありませんが、カリフォルニアの開発は、十八世紀のスペイン植民地政策に始まります。メキシコのスペインからの独立により一時メキシコ領となりましたが、一八四六年アメリカ合衆国に編入されています。サンフランシスコも最初は、北部カリフォルニアの一寒村でしたが、ゴールド・ラッシュにより人口は急激に膨れ上がり、またたく間にアメリカ有数の港町になったようです。地理的な条件で、ヨーロッパからの入植者が東海岸に上陸したように、アジアからの移民は西海岸から上陸しています。今でも、サンフランシスコの人口の二〇％は中国系といわれる白人は五〇％以下といわれています。世界第二の規模のチャイナ・タウンがダウン・タウンにあります。さらに第二・第三のチャイナ・タウンが出来つつあります。アメリカ文化の一面が東海岸から上陸したヨーロッパ人に造られたとするなら、カリフォルニア州は、まさに「different shore」といえます。温暖な気候、エキゾチックな豊富な食べ物、極めて魅力的な街サンフランシスコは、常に、アメリカ人の最も住みたい街の一つに挙げられます。狭い地域に所狭しと建てられた住宅の家賃は、ニューヨークに並ぶといわれています。高い家賃のため、人口の市外への流出が続いて、ゴールドゲート・ベイブリッジなどサンフランシスコと郊外を結ぶ橋の朝夕のラッシュは社会問題になっています。しかし、日本からみれば、これも許容範囲ですか

「サンフランシスコから」

雪竹 浩

私が所属しているカリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) は、ダウンタウンから車で約二〇分の小高い丘の上にあります。サンフランシスコでも最も霧の深い地域です。近くには、フラワームーブメント発祥の地ヘイトアシュベリー、同愛のメツカ、カストロストリートなどがあります。限られた土地に、医学部、歯学部、薬学部、看護学校がありますが、市民との協定により、これ以上敷地の拡大はできません。そのため、大学施設は空に向かって膨張を続けています。土地を効率よく利用するため、各ビルディングは寄せ木細工の様に複雑に絡み合っています。未熟児の死亡原因の一つである呼吸窮迫症候群は肺サーファクタントの不足によって起こりますが、私の研究テーマは、このサーファクタントのタンパク成分の機能を動物モデルを使って検討する事です。UCSFの心臓血管研究所のサーファクタント研究グループは、研究室を分散して持っています。スパゲッティの様に複雑怪奇に絡み合った廊下で、試験管を持ったまま道に迷い、目的の場所に行けなかった事もありました。

実験に関する指導は、オーストラリア出身の Dr. Hawgood に、アメリカの男性 (私もアメリカに住んでいる以上は、アメリカ男性なのだとおぼやかす) は、いかにあるべきかは、二十代以上続いたイギリス系アメリカ人 Ms. Brown に諭されながら毎日おこなっています。

「フィラデルフィア雑感」

前川 隆文

晩秋の空を見上げると、アメリカの空は、いく筋もの飛行機雲が、地上のジャム・トラフィックに負けぬぐらいの混み具合を物語っています。その広い空のもと、私は今、第二外科より派遣され、ペンシルバニア州フィラデルフィアにある一八四八年に創立されたハーネマン大学医学部外科に留学しています。まだ、半年だけの留学で、軽々にアメリカを話すには、余りにも経験不足ですが、私が垣間見たアメリカを書いてみようと思います。

まずは、アメリカのレジデントについて少々。レジデントを受験するためには、過去の好成績はもちろんのこと、必要不可欠な書類として、卒業大学の教授や、居住地域の市長などの推薦状を貰わねばなりません。ですから、医学生は、在学中に、教授からの推薦状を貰う為に論文を書く一方で、市や町のボランティア活動に一年以上参加し、市長や団体からの推薦状を貰って、受験資格を充たし、見事、国家試験に合格すれば、レジデントとして過さるのです。

この外科には、毎年十人程のレジデントが入ってきます。次に、生活面では、まず第一に、製造年数が古く錆びだらけの車を多く見受けられます。これはまさしく、窓ガラスの代りに紙やビニールで覆っただけの車、全く別の車のドアをガムテープでとめただけの車など、廃車同然の車には驚かされます。スーパー当然の如く二・三粒味見をしてから買う光景を見ることができません。フランスパンなどは、パンコーナーからキャッシュヤーに到達するまでに、一食分は買い主の胃の中へ。レストランのサラダバーのドレッシングコーナーでは、自分のサラダにかける前に、ひとさし指で、しっかりと味見。それも指を洗えることなく、何種類ものドレッシングを巡るのを見たときは、こちらの食欲が無くなってしまいました。これも合理主義と思えばそれまでですが、合理主義もマナーの面で、肩に皺を寄せられるまでに至ると考えものです。

ともあれ、社会主義が崩壊した今、合理主義の自由社会アメリカがどのように歩んでいくのか。興味は尽きませんが、アメリカを実際に見ることが出来るのも、あと半年。少しでも多くの事柄を見聞きし、アメリカでの経験が、より有意義なものとして消化できればと願っている次第です。

中心ホアン立アム
のティマニニ
アシマニ上バ
ティラハ頂シリ
ラセン(場)眺、ペン
ラデル(フィ)は、シ
にある(市場)は、ウ
市議会は、ペン
州の創設した、

第八期笹川医学奨学金制度
研修生として平成三年四月に
来日しました張波です。笹川
財団の助成を貰うには、中国
国内でかなり厳しい審査があ
りましたが、運よく全てクリ
アしてこのチャンスをつかみ
ました。現在、第二内科荒川
規矩男教授の御指導のもと、
動脈硬化とインスリンに関
する研究を行っています。私
は生化学的な知識があまり
なかったのですが、第二内科
の講師、生化学第一の立石
助教授の御指導で遺伝的高
脂血症ワサギのインスリン抵
抗性を初めて報告し、論文が
Atherosclerosis という
雑誌に受理されとても喜んで
います。福岡大学は実験施設
のみならず、コンピュータ
センターも充分に利用でき
る素晴らしい研究施設はみ
たことありません。私の故郷
は中国四川省成都市で二内科
には偶然同じ出身の劉先生も
いて心強く思っています。何
よりも研究が productive
なので楽しい毎日です。一年
間という限られた留学期間
ですが、日本の生活を二〇〇
％エンジョイして、たのしい
思い出を作ろうと思っていま
す。

中国四川省成都市からやっ
てきました劉端です。平成3
年5月より福岡大学長期滞在
外国人研究員として第二内科
荒川規矩男教授のもと血清脂
質、特に高比重リポ蛋白の生
体内代謝を研究しています。
日本留学のいきさつですが、
私の父(四川省華西医科大学
生化学教授)と直接の指導教
官である規矩男教授は以前同じ
期米国のある研究室で働いて
いたと言ったので、その後
日中両国において「福岡一
都スタディ」という疫学調査
を主催している関係で、私の
希望がすんなりと受け入れら
れたと思っています。福岡市
は緑が多くとてもきれいな町
で、医局の先生や秘書さん方
は、やさしく親切です。日本
食や生の刺身など、はじめと
ても食べられなかったのです
が、今では大好物となってい
ました。しかしときどき
連れて行ってもらう中華料
理、もともと、日本風中華料
理ですが、ほっとする思いが
します。できるだけ多くの知
識やテクニクのみならず日
本語会話も十分に修得し頑張
ろうと思っています。

声の欄

リサーチビジターからの

福岡大学長期外国人研究員

第二内科 張 波
第二内科 劉 端



教室紹介

福岡大学耳鼻咽喉科学

耳鼻咽喉科学教室は、開
講以来曾田豊二教授が主宰
されています。

研究面では神経耳科学、
特に聴覚学に力を注いでお
り聴性脳幹反応やトポグラ
フィの研究では全国的に
高い評価を受けている。最
近では他覚的嗅覚検査の確
立を目的として、二オイ刺
激に対する脳波や誘発電位
トポグラフィの研究を行
なっている。

外来診療は毎日行なう一
般外来他にアレルギー外
来、めまい外来、耳鳴外

来、腫瘍外来といった特殊
外来を設けており、毎週土
曜日は食道発声教室が開か
れている。毎年一月初めに
は、当科にて治療を行なっ
た頭頸部腫瘍患者との「腫
瘍会」を開催し医療従事者
と患者、また患者同志の懇
親の場となっています。

関連病院は、下関厚生病
院、新小倉病院、済生会八
幡病院、山田日赤病院、国
立中央病院、九州がんセン
ター、筑紫病院などに医師
を派遣しており、地域医療
にがんばっています。

その時の互いに真剣なやり
取りは実に厳しものでした。
このような研究チェック機構
が、日本の大学や研究機関に
あっても良いのかも知れませ
ん。

フランスの研究機構が日本
のそれと同じである訳は
ありませんので、両者を
単純に機械的に比較し、良
し悪しを論ずることはでき
ないと思います。しかし、フ
ランスは、現在のアメリカ中
心の科学文化圏とは独立し
た一つの文化圏を目指して
います。その意味で、これか
らの日本の科学文化の国際
化に参考に



中国四川省成都市からやっ
てきました劉端です。平成3
年5月より福岡大学長期滞
在外国人研究員として第二
内科荒川規矩男教授のもと
血清脂質、特に高比重リポ
蛋白の体内代謝を研究して
います。日本留学のいきさ
つですが、私の父(四川省
華西医科大学生化学教授)と
直接の指導教官である規矩
男教授は以前同じ期米国の
ある研究室で働いていたと
言ったので、その後日中両
国において「福岡一都スタ
ディ」という疫学調査を主
催している関係で、私の希
望がすんなりと受け入れら
れたと思っています。福岡市
は緑が多くとてもきれいな
町で、医局の先生や秘書さ
ん方は、やさしく親切です。
日本食や生の刺身など、は
じめとても食べられなかった
のですが、今では大好物とな
りました。しかしときどき
連れて行ってもらう中華料
理、もともと、日本風中華
料理ですが、ほっとする思
いがします。できるだけ多
くの知識やテクニクのみな
らず日本語会話も十分に修
得し頑張りようと思ってい
ます。

教室便り

学位取得

富田 昌良 (外科学第二)
福岡大学に提出。平成三年九月二十日付で医学博士授与。

論文名「Comparative studies of decay accelerating factor and HLA-DR within the CD8-brightly positive population。」

論文名「「X」の脳血管病および脳実質内のアセチルコリン及び Vasactive intestinal polypeptide (VIP) 含有神経の神経支配に関する実験的研究」

論文名「「一九三〇年出生 cohort」を中心とする死亡率の異常動向」

論文名「「Crohn 病の合併症に関する研究」

論文名「「An index of disease activity in patients with ulcerative colitis。」

論文名「Genotypic and cytogenetic study of acute myelocytic leukemia and chronic myelocytic leukemia in blast crisis: Specific rearrangement pattern does not involve Jb gene locus。」

論文名「Effects of Captopril on opioid peptides during exercise and quality of life in normal subjects。」

論文名「大脳半球外側面表在静脈の吻合形式のX線解剖学的検討—いわゆる Inferior Anatomic Vein of Labbé について—」

論文名「肝細胞癌主腫瘍に対する Lipidol 併用 TAE の抗腫瘍効果の判定—68切除症例をもとに—」

論文名「充実腫瘍型胃癌の臨床病理学的研究—免疫組織学的検討と臨床像について—」

論文名「連続硬膜外ブロックの急性帯状疱疹治療期間におよぼす影響—間歇硬膜外ブロックとの比較—」

論文名「連硬膜外ブロックの急性帯状疱疹治療期間におよぼす影響—間歇硬膜外ブロックとの比較—」

論文名「「Crohn 病の合併症に関する研究」

論文名「「An index of disease activity in patients with ulcerative colitis。」

論文名「Genotypic and cytogenetic study of acute myelocytic leukemia and chronic myelocytic leukemia in blast crisis: Specific rearrangement pattern does not involve Jb gene locus。」

論文名「Effects of Captopril on opioid peptides during exercise and quality of life in normal subjects。」

論文名「「Crohn 病の合併症に関する研究」

論文名「「Crohn 病の合併症に関する研究」

論文名「「An index of disease activity in patients with ulcerative colitis。」

論文名「Genotypic and cytogenetic study of acute myelocytic leukemia and chronic myelocytic leukemia in blast crisis: Specific rearrangement pattern does not involve Jb gene locus。」

論文名「Effects of Captopril on opioid peptides during exercise and quality of life in normal subjects。」

論文名「「Crohn 病の合併症に関する研究」

論文名「「An index of disease activity in patients with ulcerative colitis。」

論文名「Genotypic and cytogenetic study of acute myelocytic leukemia and chronic myelocytic leukemia in blast crisis: Specific rearrangement pattern does not involve Jb gene locus。」

論文名「Effects of Captopril on opioid peptides during exercise and quality of life in normal subjects。」

論文名「「Crohn 病の合併症に関する研究」

論文名「「An index of disease activity in patients with ulcerative colitis。」

論文名「Genotypic and cytogenetic study of acute myelocytic leukemia and chronic myelocytic leukemia in blast crisis: Specific rearrangement pattern does not involve Jb gene locus。」

論文名「「Crohn 病の合併症に関する研究」

論文名「「An index of disease activity in patients with ulcerative colitis。」

論文名「Genotypic and cytogenetic study of acute myelocytic leukemia and chronic myelocytic leukemia in blast crisis: Specific rearrangement pattern does not involve Jb gene locus。」

論文名「Effects of Captopril on opioid peptides during exercise and quality of life in normal subjects。」

論文名「「Crohn 病の合併症に関する研究」

論文名「「An index of disease activity in patients with ulcerative colitis。」

論文名「Genotypic and cytogenetic study of acute myelocytic leukemia and chronic myelocytic leukemia in blast crisis: Specific rearrangement pattern does not involve Jb gene locus。」

論文名「Effects of Captopril on opioid peptides during exercise and quality of life in normal subjects。」

論文名「「Crohn 病の合併症に関する研究」

論文名「「An index of disease activity in patients with ulcerative colitis。」

論文名「Genotypic and cytogenetic study of acute myelocytic leukemia and chronic myelocytic leukemia in blast crisis: Specific rearrangement pattern does not involve Jb gene locus。」

「親心・子心」(6)

脳神経外科研修医 池田 耕一



この間にか、白い名札に所属と名前をかきつらねて六カ月がたち、何とか仕事にも馴れてきた今日この頃です。

この度は、このような大役を頂きまして誠に恐縮しておりますが、自分の事を棚の上におき、半年間で感じた愚かな研修医のたわ言を述べさせていただきます。

次に研修医のローテーションについて考えてみたいと思っております。内科は二内科と二内科を交互にローテーションが行われ、建築病院でも外科系(外科・整形外科・脳外・麻酔)のローテーションが活発に行われています。

最後に後輩諸君へ、「この若者は、よく耳にわたる言葉です。私もその中の一人なので、大した事は言えないのですが、入局いたしました一期生、二期生の先輩方と接する機会も増えて思っています。益々活発なローテーションシステムを確立し、それを有効に利用されることを切に願います。

五年時の臨床実習では、各科それぞれお忙しい時間をぬって特徴のある実習をされています。BSLというのは今思いますが、大変余裕のある時間割で、楽をしようと思いがちです。勉強しようと思いがちです。勉強しようと思いがちです。勉強しようと思いがちです。

以上、とりとちもなく思いのままに書きまして誠に申し訳ございません。何もできない研修医のたわ言だと思っけなければなりませんし、人

に聞く習慣も持たなければいけません。あなた方が目にしてる研修医の姿は二年後のあなたの姿です。しっかりとがんばりましょう。

六年時になると、目標はただ一つ国家試験合格です。確かに六年間の年月と学費、合格しないと我々は、ただブライドの高い愚か者でしかありません。ですから模試の度に、担任の教授より大切なお説教があるわけですが、どうしても過保護な印象をぬぐえませんが、二十を随分越えた大人の指導としては丁寧すぎると思えます。少しき放して

学生側のやる気やうながす方が随分効果的ではないでしょうか。確かに国家試験の合格率というものは、ある意味で大学自身のランクづけの一つの基準のように取り扱われているようですが、合格率アップばかりでなく、六年生をもっと大人扱いした指導をしてもらいたいものだと思います。

来訪

Current Status of Psychodynamic Psychiatry. "Psychoanalysis in the U. K." ③1991. 6. 14~6. 15 ④精神医学教室

Dr. Samuel Hawgood ① Associate Professor of Pediatrics, Division of Neonatology, University of California, San Francisco, U. S. A. ② 総合研究所主催講演 "Recent Advances in Surfactant Apoprotein Research." ③1991. 7. 10 ④小児科学教室

Rakesh K. Tandon ①全インド医学研究所消化器科準教授 ②教室を表敬訪問 ③1991. 10. 22~10. 23 ④外科学第一教室

Ta-Jung-Lin ① Mercer University School of Medicine (Professor) ②総合研究所主催研究会「生殖生理学における最近の話題」 ③1991. 5. 10 ④産科婦人科学教室

Jules Constant ①ニューヨーク州立大学教授 ② 筑紫病院内科特別講義「聴診による心臓病の診かた」 ③1991. 6. 8 ④筑紫病院内科消化器科

Iturriaga R. HERNAN ①国立チリ大学教授 ② 肝臓病の診断と治療の研究のため ③1991. 10. 14~10. 26 ④内科学第一教室及び外科学第一教室

Dr. James D. Templeton ① Member of the British Psycho-Analytic Society, England ② 教室講演会および福岡精神分析研究会にて講演 "The

平成3年5月以降、本学医学部または病院を訪れた外国人学者はつぎのとおり。①所属 ②目的 ③来訪日 ④訪問先

申 英 激 ①韓国 高麗大学校医科大学 解剖学 主任教授 ②解剖学 山田英智教授との研究打ち合わせ ③1991. 8. 5~8. 10 ④解剖学第二教室

宣 明 勲 ①仁済大学校医科大学教授、農村医学研究所所長 ②農業従事者の健康調査打ち合せ ③1991. 5. 13 ④衛生学教室

福岡大学医学会総会・例会の報告

日時 平成三年七月三十一日(水)

午後二時より

場所 福岡大学医学部臨床大講堂

第14回総会

議事

1、役員改選

2、平成二年度会計報告ならびに平成三年度予算(案)

第25回例会

1、座長 井上 幹夫 教授

2、座長 鈴木 九五 教授

健康管理科 鈴木 九五 教授

公衆衛生学 稲益 建夫 助教授

「予防医学に魅せられて」

座長 小野 庸 教授

「Jacobson」山本分類と

放射線医学 神宮 賢一 助教授

編集後記

平成二年度の年報に三好前

医学部長が書かれたように、

今日いただいた時期は転換の時点であります。今回は新しい役職者と御定年になられる先生方から原稿を頂戴しました。計画したのが昨年十一月始めで、筑紫病院長から原稿を頂く準備をしていなかったため、時間と紙面が少ないうえ、突然、松崎院長に原稿をお願いして大変に御迷惑をおかけしました。心からお詫言を申し上げます。今回筆者が最も興味深いのは松岡新医学部長の「親心」と研修医池田君の「子心」です。どうぞ対比して読み比べて頂ければ幸いです。(T・K生)